

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	オスティアールポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に
Author(s)	藤井, 慈子
Citation	史学研究, 313 : 56 - 82
Issue Date	2022-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055730
Right	
Relation	



オスティアーポルトゥス出土の 後期ローマのカット・ガラス浅碗断片： 初期キリスト教的事例3点を中心に

藤井 慈子

はじめに

都ローマの2つの港町オスティアとポルトゥスでは、筆者が知る限り10点の4世紀後半のカット・ガラス碗断片が出土している。それらは、ガラスの色や質、器形、カット技法ならびに出土状況に基づき、帝政後期に活動していたローマの2つの工房の製品であることが、Lucia Saguiによって示されている。その10点の装飾主題は、伝統的なギリシアローマの神々から英雄、牧歌的な羊飼いや、そしてキリストや使徒、殉教聖人たちまでと、当時の人々の幅広い関心を物語っている。本稿では、ローマとその港町で使用されていたガラス製品および製造にかかる近年の研究成果を概観した後、先の10点の内、キリスト教的3点に注目する。

1. 都ローマおよび港町オスティアーポルトゥス出土のガラス製品とガラス製造

都ローマおよびその港町で普及していたガラス製品およびガラス製造については、Lucia Sagui と Barbar Lepri らイタリア考古学者の発掘資料に基づく研究成果により、今世紀に入って急速にその全貌が明らかになりつつある。たとえば、Sagui-Lepri が、国や調査隊の枠を超えたオスティアーポルトゥス出土のガラス調査を行い⁽¹⁾、未発表の事例も含めて網羅的に検討した成果は、2018年の「オスティアとポルトゥスにおけるガラスとガラス製造の示唆」にまとめられている (Sagui-Lepri 2018)⁽²⁾：両港で出土した紀元前1世紀から紀元後6世紀までの7世紀間にわたるガラスの器形や装飾の変遷は図版3枚に集約され (figs. 5-7)⁽³⁾、少なくとも2世紀後半から3世紀頃の両港町におけるガラス製品製造 (二次工房)⁽⁴⁾を示唆する窯址

オスティアールポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井) (figs. 2-3の*印)、原料塊 (fig.16) ならびに成形過程で生じる「colletti (吹き竿に残ったガラスが取れた際にできる孔のある断片)」 (fig. 14) などの屑が確認され、出土した原料塊の組成分析からは、それがリサイクル・ガラスではなく、シリアーパレスティナ地域やエジプトのガラス原料塊製造(一次工房)からの輸入品だったこと等が明らかにされた (Verità et al. 2017)。

さらに2021年に Lepri が上梓した『2～3世紀のガラス:ローマ～オスティアール一帯の製造と流通』では、総論として、帝国各地で発見された一次工房址と二次工房址74箇所の一覧表と、それらの分布にガラス積載難破船の分布も示した地図 (Lepri 2021, 28, fig.6) によって、ローマ・ガラスの製造と流通が一目で理解できるようにしている。また各論では、都ローマやオスティアールポルトゥスで発見されたガラス製造の示唆、ガラス製品および装飾の変遷、ならびに香油瓶や方形瓶などに型吹きされた印 Bolli について、1960年代から現在まで都ローマとその周辺で行われた19の発掘で出土したガラス製品や製造関連の遺物に基づき、帝政中期の状況を詳細に論じている。なお、同書には、Sagui による未発表のオスティアの「泳ぎ手の浴場 Terme del nuotatore (V. x. 3)」のガラス遺物も収録されている。

Sagui-Lepri らの研究は、都ローマとオスティアールポルトゥスで同じようなガラス器が普及していたことを物語っているが、以下、年代ごとの特徴を彼女らの3枚の器形図の変遷を元に概観する。まず、吹き技法が開発されて間もない1世紀には、目新しさも手伝ってか、それ以前の鑄造製による碗や皿など開口型の容器とは比べ物にならない程、一気に様々な器形が開いた (Sagui-Lepri 2018, fig. 5): 口のすぼまった頸の長い香油瓶 *unguentarium*、球状の胴部に頑丈な両把手が付いた浴場に持参する香油瓶 *aryballos*、運搬・収納に適した方形瓶や片把手水差し、オスティアに相応しい穀物計量容器 *modius*、貯蔵に適した大型の壺や埋葬用の骨壺などに加え、アレクサンドリア製といわれる、水晶を模した無色透明の切り装飾付き杯などの高級品もみられる。その後、2世紀には引き続き *unguentarium* や *aryballos*、メルクリウス瓶(細い方形瓶の底部にメルクリウスが型押しされた瓶)などの瓶類は使用され続けるが、再び開口型の容器が主流になる: 高台付きの口の広がった碗や皿類または円筒形の杯類である。2世紀末から3世紀にかけては、口のすぼまった、背の高い、足付きゴブレットや筒形の杯、半球状の碗などの飲料容器が流行した。南フランスの Embiez 島1で発見された難破船の積み荷は、2世紀末～3世紀のガラス製品であった。オスティアールポルトゥス出土と類似する器形は、それらがローマの港町で積載された可能性も示唆する (Lepri 2021, 41, fig.7)。

この時代の飲料容器には、ホットワークによる凝った紐装飾や貼付装飾、つまみ装飾などが施されている (Sagui-Lepri 2018, fig. 6, 8)。これらの装飾は、その美しさだけでなく、フォークもナイフもなかった当時、食べ物をつまむ同じ手で持つ杯を滑りにくくする機能も持ち合わせていたと思われるが、職人たちの卓越した技を

示している。特に紐と貼付装飾は、一人は本体のガラスが冷えすぎないように熱コントロールをしながら、もう一人は別の竿に巻き取ったガラスを紐状や小さな塊に落とし切り、さらにそれが冷めて固くならない内に器具で押して（ピンサーで挟んで）模様を出し、最後に足台までつけるという、少なくとも二人以上の職人が息を合わせて手早く造らなければならない、高度な技が用いられている。石灰ソーダガラスという、特に冷えやすいローマ・ガラスでは、なおさらのことである。同様な紐装飾は都ローマでも、動植物や海の生物を図案化したものから陶器のスリップ模様のようなものまで、Lepri が分類したいくつものタイプが確認されている他、円盤型の貼付け文にも貝やロゼッタ、男性や女性の胸像まで幅広くみられる（Lepri 2021, 102-128）。つまみ装飾の中には、Lepri が注目する独特な魚のヒレのような痕ができるものがある。これらの紐装飾や貼付装飾を有するガラス器は、ドイツやシリアでも出土しており、その製造地がどこかで議論が分かれる中、ローマ工房製の特徴を提示する新しい発見が一石を投じることになるだろう。一方で、2世紀末から3世紀にかけては、コールドワークによるカット装飾が施された碗類も登場する。1つは、「Contour grooves」グループで、意匠の輪郭線が深く彫られた特徴を持つ。神話的場面や海の生き物の主題が多く、アレクサンドリア製と考えられている。この事例は、オスティアの「泳ぎ手の浴場」からも3断片が出土している（Lepri 2021, 100-101, fig.55 no.1-3）。もう1つは、「Linco」グループで、ギリシア神話の主題がギリシア語の記銘と共に刻まれている。このグループもエジプト製とみなされている（Lepri 2021, 100-101, fig.55 no.4-5）

これらのガラス器が製造された2世紀末から3世紀、オスティアでも二次工房を示唆する遺物が発見されている：第三地区の倉庫 *Horrea* (III. ii. 6) や第四地区のショーウィンドウのあるタベルナの家 *Caseggiato delle taberne finestrate* (IV.v.18) の原料塊やガラス成形過程で生じる屑ガラスである（Lepri 2021, 25-26）。前者では、1キロ近くに相当する70断片あまりが発見され、わずかに青緑や青色のガラスも含まれるが、ほとんどが無色透明のガラスで、碗類や杯、香油瓶などが製造されていたと考えられている。また、ポルトゥスでは、皇帝宮殿区域にあるトラヤヌス帝時代の柱廊付き中庭部分が、3世紀頃にはガラス工房として使用されていたことを示す円形の窯址、原料塊や成型途中で生じる屑や紐状のガラス、杯や円筒形杯の不良品等が発掘された。これらは全て無色透明のガラスで、アンチモンで消色されたことが分析で判明しており、帝政中期に都ローマやその港町で、無色透明なガラスが引き続き好まれたことを物語っている（Gliozzo et al. 2017; Verità et al. 2017）。帝政中期は、*Horti Lamiani*, *Circo Variano*, *Via XX Settembre* など、都ローマのエスキリヌス丘やウィミナリス丘でも二次工房を示唆する成形途中の屑、不良品などが確認され、アッピア街道沿いでは、*Villa dei Quintilli* の浴場内部でリサイクル・ガラス用と目される珍しい二つの燃焼室を有する方形の窯も発見されている（Paris et al.

オスティア-ポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井2015, 198-200)。

3世紀末から4世紀前半にかけては、「*Baia-Puteoli*」グループとも呼ばれる、プテオリ⁽⁵⁾の象徴的大埠頭や近隣のバイアエも含む景観が、時に *PVTEOLI* や *BAIA* という記銘と共に、浅い研磨と刻線でフラスコ瓶にカットされたグループがある(Fujii 2003; Fujii 2009; 藤井2009, 179-231; 藤井2020)。その年代は、独特の器形(切り離し口縁、先細りの円筒形の頸部、頸部付け根の括れ、直径10cmほどの球状胴部を有する瓶 = Isings 103型)、景観の中に含まれる地区名が刻まれたプテオリ出土の碑文の年代、ローマの *Horti Lamiani* 発掘での出土層でも一致している。なお、このグループの総数は、現在では断片を含め20点近くまで増えている。学術的発掘による出土品ではない初期の事例を含め、都ローマおよびその港町オスティアの出土は計9点を占める: 伝ローマのカタコンベ出土のほぼ完形1点(現ワルシャワ国立博物館所蔵)、ゴルガ・コレクションの伝ローマ出土断片4点、ローマの *Circo Variano* 出土断片1点、*Horti Lamiani* 出土断片2点、オスティアの *Via dei Vigili* 出土断片1点である(Lepri 2021, pp.101-102, fig. 55)。その出土分布は、イタリアを東端として、北はイギリス、南はチュニジア、西はポルトガルと、帝国西部に広がっていることから、プテオリや近隣のバイアエに商用もしくは観光あるいは湯治で訪れた人々が土産物として持ち帰ったとみなされている。このうち、プテオリ出土は1点もないが、同地で「ガラス職人坂街区地区」なる地区名を記した碑文が、まさに「坂道」の現ラコニア通り付近で発見されており、その坂道の浴場址で、1999年に3世紀頃に活動した円形の二次工房の窯址も報告されていることから(Gialanella 1999; Lepri 2021 p.33, no.51)、装飾の主題となったプテオリで製造されたとみなされている。

また、3世紀半ばから4世紀半ばにかけては、円錐形や円筒形のシンプルな杯や半球状碗、または片把手水差しといった飲料容器がみられる。このような杯を手にした饗宴場面は、ヴァチカン博物館所蔵のオスティアのラウレンティウス門のネクロポリス(墓31)出土壁画にみられる他、オスティアのディアナ通りの飲食店、テルモポリウムの家 *Caseggiato del Termopolio* (I. ii. 5) 一階の壁画には、赤い葡萄酒が入った杯や、卵(?)の入った杯が描かれている。

3世紀末から4世紀にかけては、杯や碗の高台部分—ガラスとガラスの間—to 装飾がサンドイッチされた、コールドワークとホットワークを融合させたサンドイッチ・ガラス技法が新たな形で復活する。吹き技法を使ったローマ時代のこのゴールド・サンドイッチ・ガラスは、ローマのカタコンベで墓(柵上墓)の正面に目印かお守りか記念のために貼り付けられた。このため、杯や容器の高台部分というよりも、周囲がギザギザに欠けた円盤型をしており、Charles Rufus Morey のカタログでは460点近くが収録されている(Morey 1959)。そして、ヘレニズム時代のゴールド・サンドイッチ・ガラスと区別する意味で、これらの帝政後期のタイプは、イタリア

語の金の底 *fondi d'oro* や金箔ガラス *vetri dorati* が併記されることが多い（藤井 2009、65–159）。オステリアからは、その出土地の詳細は記されていないが、*IVLIA / FRVCTA / BIBE* 「ユリア・フルクタよ、飲め！」などの銘文が刻まれた金箔ガラスのタイプが4点と、筆者も初見の猛獣狩り *venatio* 場面や銘文 *ZESSES*（生きよ！）が彩色されてサンドイッチされた、彩色ガラスのタイプも1点報告されている（Sagui-Lepri 2018, fig. 10）。

4世紀後半から5世紀初頭にかけては、高台付きの碗、底が丸い高台のない浅碗、筒形や円錐形の杯、片把手水差しなど食卓を飾る容器に加え、教会を照らす天井から吊るすランプが登場する。このうち、底の丸い浅碗が本稿で注目するカット装飾が施された器形だが、その装飾の中には、皇帝の飾り皿 *missorium* を模した主題もみられる。たとえば、コンスタンティノポリスで388–393年頃に製造された、直径74cmもの銀製大皿の上三分の二には宮廷場面が、下三分の一の *eserugum*（貨幣などにもみられる「作品の外側」と呼ばれる区域）には大地の女神テルスが描かれている（Grazzigli 2004）。宮廷場面は、ディオクレティアヌス帝時代以降の権力の象徴である三角破風とセルリアーナ（中央のアーチと左右の水平材から成る三連開口部）の中央に坐す皇帝が高官に巻物を渡し、両側のアーチの下にはそれぞれ共同統治の副帝が盾を手にした兵士たちに守られて座している。この大皿は、テオドシウスの治世十周年もしくは十五周年を記念して製造されたことが、金箔の痕跡のある銘文から読み取れる。そして、ローマのフォルム（ウェスタ神殿近く）から出土したガラスの小断片（Antiquarium Comunale del Celio, Rom. Inv. No.7233）に、この銀製の皿とよく似た構図のカット装飾が施されている。直径22cmの浅碗の右上部分だけが残っており、四本の柱に支えられた半月形破風の中央真下に座していたであろう皇帝とその左の副帝、そのまた左の馬を従えた兵士の正面向き頭部と、馬のたてがみの一部のみが残っている（La Rocca-Ensoli 2000, 559, no. 214; Nagel II, pp.22-23, no.7）。破風の中央には、2人のヴィクトリアが花輪を持ち、その中に *VOTA XX MULTA XXX* と記され、皇帝の左隣の人物の上には *SEBERUS* と記されている。その皇帝像をめぐっては未だ諸説あるが、*SEBERUS*（= Severus）を326年の都市ローマ長官で、コンスタンティヌス帝の在位二十周年記念を祝賀した *Acilius Severus* とみなす説もある。ただし、このセウエルスを碗の注文主とみなし、このようなガラス器は皇帝とは無関係とみなす研究者もいる（Bauer 2009, 49-50）。後述するように、このタイプのカット・ガラス付きの浅碗類は、その出土事例の多さから、工房址は発見されていないものの、ローマ製とみなされており、後述するように、様式や技法、出土年代に基づくグループ分けが試みられている。

同時期のガラス製造の痕跡は、ティベリス川沿いの *Testaccio* で発見されたガラス成形過程に生ずる屑ガラスのみである（Sternini 1989）。5世紀半ば以降の窯址としては、ローマの *Crypta Barbi* のエクセドラで発見された円形の窯址（Sagui 2007）

オスティア-ポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井)をはじめ、パラティヌス丘の北東斜面で工房の存在を示唆する原料塊や成形途中の屑や不成形品が出土しており(Sagui-Lepri 2017, 231, fig.5)、オスティアでも市場(IV.V.2)で円形の窯址など見つかっている⁽⁶⁾。

以上、帝政期のオスティア-ポルトゥスのガラス製造と製品の流れを、時に都ローマの事例を引用しながら概観した。ガラスの温度コントロールをしながら美しい紐装飾や貼付けならびにつまみ装飾を施したホットワークの容器、対照的にガラス製品が完成した後にカット装飾を施したコールドワークの容器、ホットとコールドを合わせて使うサンドイッチ・ガラスの容器、素朴でシンプルな食卓のガラス器など、様々な装飾を施したガラス器がローマの港町で暮らす人々に用いられていた。そしてその製造を行っていたと思われる、発掘で確認されたわずかな工房址や製造の痕跡は、Sagui-Lepri が指摘しているように、都市の中心にある場合は放棄された建物の中に造られ、中心から外れている場合は原材料の荷卸しや、燃料の確保、商品の搬出に適した船着き場の傍にあった。

2. オスティア-ポルトゥス出土の帝政後期のカット・ガラス

オスティアとポルトゥスでは、筆者が知る限り、4世紀後半から末期にかけてのカット装飾付き浅碗断片が10点出土している。最初期の研究ではプテオリ製とみなされる場合もあったが、パラティヌス丘北東斜面やカエリウス丘をはじめ、ローマやオスティア-ポルトゥスの出土品、ならびに博物館やコレクションの所蔵品を調査したSaguiによって、都ローマの2つの工房で造られたことが提唱された。すなわち、4世紀後半に活動した「刻線+研磨 *intaglio e abrasione*」工房(Sagui 1996)と、4世紀末に活動した「陰刻 *a rilievo negativo*」(Sagui 2009)工房の2つである⁽⁷⁾。「刻線+研磨」工房では、人や物の輪郭細部は細い破線の刻線によって括られ、その内部は浅く研磨されている。この研磨は、透明なガラス器に「すきガラスの効果」をもたらす。人物表現は、平面的でデフォルメされた味わいはあるが、自然主義的な忠実な模倣とは程遠いものである。人物の顔は常に横向きであり、細い線だけで描いた横顔のシルエットに、大きな菱形で強調して描かれた目が印象的である。これに対し、「陰刻」工房の人物像は、(碗の内側からみた時に)立体的に浮き上がるような、広く深い陰刻で彫られ、その効果を際立たせるかのように、幾重にも襷がよった衣服を着ている。人物の顔には、横顔と正面向きがあるが、いずれもまっすぐな鼻筋に、大きなアーモンド形の寄り目、短い二本線の口と短い楕円の陰刻線による髪が特徴的である。この他、楕円形の木の子や石、(中央の装飾を囲む枠がある場合には)口縁下の数本の刻線による同心円文枠、波打つ蔦の葉に交互に配された八花卉の枠、なども「陰刻」工房の特徴である。ガラス器自体をみると、いずれも素地は淡い緑がかった無色透明、器形は皿・浅碗・半球状碗など高台のない開口型の

容器である。ただし、「刻線+研磨」工房では、閉口型の杯や瓶などもみられる。Sagui は、この2工房の出土分布に注目し、どちらもローマ・オスティアに出土が集中していることをみた。とりわけ「陰刻」工房製品は、これまで知られている総数120点近くの約半分以上がローマおよびその近郊から出土している (Sagui 2009, 215, fig.1)。

なお、上記の2工房については、1997年に『イタリア北部およびラエティア出土の帝政中期～後期カット・ガラス』、2002年に『4世紀のローマにおけるカット・ガラス美術』を上梓し、カット技法や主題に基づき5つのグループ/工房に分類した Fabrizio Paolucci の研究もある。Paolucci は「刻線+研磨」工房については Sagui グループとして同じ分類だが、「陰刻」工房については、先に言及した *missorium* と似た皇帝的な主題は「Vicennalia」グループ、キリスト教的主題は「Maestro di Daniele」グループと別々の工房にしている。さらに、後者についてはキリスト教に特化した工房とするが、Sagui は同じ様式・技法・年代のものを主題別で違う工房とすることに疑問を呈している。この他、2020年に『古代末期の具象的カット装飾ガラス製品 Die figurlich gravierten Gläser der Spätantike』二巻本-3世紀半ばから5世紀にかけて帝国で製造・流通したカット・ガラス373点を対象とした初めての網羅的研究で、一巻目ではカット技法の精査、カット技法の特徴に基づく分類(グループA～G)とその出土分布を、二巻目では373点のカタログ(第一巻目のグループごとではなく、主題別分類:世俗的、神話的、キリスト教的、特定できない断片という四項目別)を取録-を上梓した Stefanie Nagel も、この2工房を扱っており、「刻線+研磨」工房は「菱形の目グループ Rautenaugengruppe」のグループB、「陰刻」工房は「彫刻的な人物像 plastisch wirkende Figuren」のグループAとしている。もっとも、Nagel のグループAは、おそらく報告者の年代に基づき、事例によって4世紀、4世紀末から5世紀初頭、あるいは4世紀から5世紀と異なり、Sagui の設定年代設定に即していない。

以下筆者は、オスティア・ポルトゥス出土の10点について、出土場所、サイズ、主題、Sagui の説明に基づく筆者による2工房の分類、所蔵先と番号、また Nagel の第二巻のカタログ番号を併記する(一部 Nagel に収録されていない場合は空白とする)。また、オンラインで閲覧可能なものについては、URL を添付した。

- ① オスティア、プロティロの邸宅 (V. ii. 4-5) : 1938-1939年の発掘で同邸宅の下水から出土。直径18cm、高さ5.6cmの浅碗断片 (16断片を接合、オリジナルの上三分の二近くが復元)。発掘者の Squarciapino はナツメヤシの木とパン籠の間で十字架を担ぐ勝利のキリストと同定し、プテオリ製と解釈。「陰刻」工房。オスティア収蔵庫 (inv.no.5201)、Nagel II no. 181。

<https://journals.openedition.org/mefra/6506> (fig. 11上) ならびに図1

オスティア-ポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に (藤井)

- ② オスティア、トラヤヌスの運河 (fossa Traiana) の左岸、解体された精錬所 (GIGOM/ SAROM) : 1969年発掘。直径約23cm、高さ約2.4cmの浅碗断片 (4断片を結合、オリジナルの碗の口縁は下半分以上が残っているが、中央部は左下のわずかな部分を除いて欠損)。Saguiの実測図には、下部には葉の生い茂った若木と、左下には小刀を持った右手部分などが残存し、口縁のすぐ下にある。キリスト教的図像ならば、アブラハムが短刀を振りかざした瞬間に神が代わりの子羊を示す「イサクの犠牲」の場面もありうるが、あまりに断片的で特定は不可能。「陰刻」工房。オスティア収蔵庫 (inv.no.12693)。
<https://journals.openedition.org/mefra/6506> (fig. 12)
- ③ オスティアとポルトゥスを結ぶイゾラ・サクラ、聖ヒッポリュトスのバシリカ付近 : 1972年発掘。直径17.6cm、高さ17.4cm (16.8cm×8.4cm?) の半球状碗断片 (15断片を結合、碗の口縁から底部の半分近くが残存)。トロイア戦争の悲劇的場面「ヘクトルの遺体引き渡し」(アキレス、アキレスの母テティス、ヘクトルの遺体、ヘクトルの父トロイア王プリアモスの4人)。「刻線+研磨」工房。オスティア収蔵庫 (inv.no.18867)、Nagel II no. 113。
<https://journals.openedition.org/mefra/6506> (fig. 13)
- ④ オスティア、出土場所詳細不明 : 直径約16cmの半球状碗の口縁から胴部にかけての一片。口縁下には何かが盛られたような容器の一部と、左向きの人物像と右肩の一部が残存。人物像には、バシレイオンのような頭飾りがあることから、Saguiはイシス女神と想定。「刻線+研磨」工房。オスティア収蔵庫 (inv.no.562)。
<https://journals.openedition.org/mefra/6506> (fig.11下)
- ⑤ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土 : 1865年発掘。浅碗の右下部分の断片。長さ最大14.5cm、厚み0.3cm。口縁近くにはポディウムに立つ有翼のエロス (プッティ?) がおり、そのすぐ隣に長い踝までの衣服を着た人物の一部が残存。エロスであれば、隣に立つのは母のアフロディーテかもしれない。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館 (Museo Cristiano, inv. no. 60298)。Nagel II no. 236 (ただし Nagel は出土場所不明と記載)。
<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60298.0.0>
- ⑥ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土 : 1865年発掘。浅碗の左上部分の断片。長さ最大14.8cm。厚み0.3cm。一番上には、布を垂らした右手に豊穡の角を抱え持って立つ短髪で裸の小さな人物像、その右側から川が下へ向かって流れ、右手で杖を持ち左手を広げて玉座に座す人物の背後で二つの支流に分かれ、その下にはヴェールを被った右を向いた人物の頭部が残存。玉座の人物は短髪で、その頭の周りから草のようなものが生えている、あるいは放射状の光が放たれている。一番上の人物像について、女神フォルトゥーナとヴァ

チカン博物館では解説されているが、厚い胸板はむしろ男性的である（ゲニウス？）。また、玉座の人物は、アウグストゥス帝の平和の祭壇で東側の左パネルに描かれた大地の女神テルスともみなされてきたが、むしろ同祭壇で右パネルに描かれた都ローマの擬人像の可能性もあるのではないだろうか。もしも後者であれば、流れる川はティベリス川で、二つの支流に分かれているのは、河口へと続くオステティアと、トラヤヌス帝時代の運河でつながるポルトゥスを象徴的に示しているのではと想像が膨らんでしまう。一番下の人物は、ヴェールを被っていることから、犠牲を捧げている人物の頭部と解釈されている。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館（Museo Cristiano, inv. no. 60299）。Nagel II no. 235。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60299.0.0>

- ⑦ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土：1865年発掘。浅碗の下部の断片（二断片）。長さ最大9.1cm、厚み0.3cm。装飾が施された折りたたみ式椅子 *sella curulis* に座す男性の右足と、その右により小さく描かれた踝までの長い衣服を着た裸足の女性像の一部が残存。このような折りたたみ式椅子に座す人物は、コンスルなどの高官だが、聖人の可能性もある。そこで、傍らに立つ裸足の女性像を女神とみるか、オラン像や聖女とみるかで、異教とキリスト教に分かれるが、それを決定づける女性像の上半身が欠落している。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館（Museo Cristiano, inv. no. 60301+60307）。Nagel II no. 278。ヴァチカン博物館のサイトでは別個の写真であるの対し、Nagel は二断片接合した写真を掲載。Nagel はオステティア出土とし、ヴァチカンの所蔵番号も60301のみ記載。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60301.0.0>

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60307.0.0>

- ⑧ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土：1865年発掘。接合できない浅碗の二断片。より大きな断片の大きさは14.2cm×7cm。碗の下部四分の一ほどが残存。短いトゥニカと脛あてを付けた裸足の人物（羊飼いや？）が地面に座り、わずかに残る上半身では、左腕を曲げて（おそらく右腕も同様に）している。人物の傍らには二つに割れた蹄（羊？）の後ろ脚がみえ、人物の先には、奇妙な動物の頭部像が付いた革袋のようなものが地面に転がっている。もう一方の断片にも、羊を示唆する動物の四肢の一部や羊飼いや脛あての一部が残っている。そこで、牧歌的場面であることは確かだが、キリスト教的と特定できる要素はみられない。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館（Museo Cristiano, inv. no. 60302-60303）。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60302.0.0>

- ⑨ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土：1865年発掘。浅碗断片7.8cm×11cm、

オスティア-ポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井)

厚み0.3cm。後述する律法の授与図のキリストと巻物を受け取るペトロの部分が残存。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館(Museo Cristiano, inv. no. 60313)、Nagel II no. 177(ただし、ここでもオスティア出土と表記)。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60313.0.0> および図2

- ⑩ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土:1865年発掘。浅碗の右半分と左下の二断片。長さは最長17cm×10.5cm。後述するキリストと聖人の一部が残存。律法の授与図とも解釈されるが、その決定的要素はかけている。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館(Museo Cristiano, inv. no. 60314-60315)、Nagel II no. 176。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60315.0.0> 図3

この10点を出土地別にみると、オスティアから詳細不明な事例も含めて3点、両港を結ぶイゾラ・サクラから1点、ポルトゥスから6点出土している。なお、唯一住居址であるオスティアのプロティロの邸宅(V. ii. 4-5)は、オスティアの第五区のラウレンティウス門近くに位置する。その名の由来は、二本の柱に支えられた三角破風付きの記念的入口 *prothyrum* にある。この破風部分には所有者を示す銘文が彫られていたが、一部の文字を除きその大半が失われている。この邸宅は、オスティアの他の邸宅と同様に、既存の建物を利用しての改築により3世紀半ば頃にはニンフェウム(泉水盤)付きの中庭とその両側の部屋が付加された。この中庭からは壁龕付きの小部屋や井戸のある地下へ、また中庭の右隣の部屋からは二階へと上がることができた。なお、カット・ガラス碗断片が出土した同邸宅の下水の配管について、Johannes Sipko Boersma は詳細な図を残しているが(Boersma 1985, fig.112)、最初の発掘者 Squarciaripino の報告と同様(Squarciaripino 1952)、そのどの箇所で見発見されたかについては言及していない。また、同邸宅では、ディアナやアポロの彫像なども出土しており、キリスト教との関わりを示すものは、このカット・ガラス碗断片だけである。もっとも、17世紀に編纂された『聖人行伝 *Acta Sanctorum*』に記載された、ガッリカヌスがオスティアでラウレンティウスに捧げたバシリカが南門の近くにあったことを想起すると(*Acta Sanctorum*, June, V)、同邸宅がラウレンティウス門の近くに位置することは示唆的である。Dugras Boin は、この史料がもしも信頼に足るものであるならば、オスティアにおいて、最初に城壁内に建てられたバシリカは、皇帝ではなく、地元の有権者主導によるものであったとする(Boin 2013, 176-178)。

一方、ポルトゥス出土の6点は、すべてポルトゥスのバシリカ *Basilica Portuense* (Maiorano-Paroli 2013) 出土である。1865年に、当時ポルトゥスの所有者であったトルロニア家が、コレクション目的で六角形のトラヤヌス帝港址周辺を発掘した結

果、その南西角でバシリカ跡が見つかり、そこから有名なフィロカルス書体の碑文断片をはじめ、バシリカの創立年代の手がかりとなる貨幣がカット・ガラス断片と共に出土した。近代的な発掘ではなかったため、それ以上の詳細は不明だが、出土品はトルロニア家から教皇ピウス9世へ献上され、ラテラノ・ピウス・キリスト教博物館 Museo Cristiano Pio Lateranense を経て現在ヴァチカン博物館に所蔵されている。発掘当時、このバシリカはヒエロニムスが言及したローマの元老院パンマキウスが建てた巡礼宿とみなされた。そこで、今日でもこの名称がしばしば使用される (De Rossi 1868 pp.37-39)。

続いて10点の内訳を工房別にみると、「陰刻」工房製が8点、「刻線+研磨」工房製が2点と、前者の方が多くことがわかる。主題別にみると、「陰刻」工房では世俗的主題1点(⑧)神話的主題2点(⑤、⑥)、キリスト教的主題3点(①、⑨、⑩)、断片のため特定できない事例が2点(②、⑦)、「刻線+研磨」工房では神話的主題(英雄)1点(③)、異教的主題1点(④)となる。なお、「刻線+研磨」工房でも「陰刻」工房同様にキリスト教的主題があり、完形品としてはシチリアの「キリスト教的」石棺に副葬されていた、現在メトロポリタン美術館所蔵のラザロの復活付き事例 (Nagel II no.173) がある。そこで、これらの2工房は、キリスト教など特定の集団に属していたのではなく、自由に注文を受け付けていたことがわかる。一つの工房でガラス碗の製造とカットの作業を行っていた可能性もあるが、帝政後期には、ガラス職人とカット職人が別個の職業であることを示唆する法的資料もある (Meredith 2015, 42-44)。たとえば、テオドシウス法典収録の337年の法律では、交易にかかわる公的奉仕から免除された職人が列挙されているが、その中でガラス職人 *vitrearum* と彫物師 *diatretarii* は別々に言及されている (*Cod. Th.* XIII.4.2)。また、ユスティニアヌスの「学説彙纂」では、法学者ウルピアヌスが *Lex Aquilia* で挙げた、彫物師に渡されたガラス容器が壊れた際に、ガラス職人と彫物師のどちらの責任が問われるかの条件が記されている (*Digest.* 9.2. 27-29)。

3. オスティアーポルトウス出土のカット・ガラス碗にみるキリスト教的主題

両港町から出土したガラス碗の内、キリスト教的主題と断定できるものは、わずか3点である。しかしながら、その3点は全て「陰刻」工房製であることから、4世紀末の、テオドシウス帝とその息子たちの時代、ローマ司教(現在では教皇)のダマス1世(在位366-384年)やシルキウス(在位384-399)の治世にローマで製造されたものといえる。そこに刻まれた図像は、旧約聖書の救済場面や新約聖書の奇跡場面などの普遍的テーマとは別の、二大使徒をはじめ多くの殉教者が葬られた聖都ローマと深く結びついた新しいレパトリーの誕生を物語っている。

オスティア・ポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井)

なお、本稿では Sagui の実測図を用いて図像の検討にあたる。そもそも1点目のオスティア出土の事例は、発掘当時の白黒の古写真を除き、カラー写真は無い。しかしながら、カラー写真があったとしても、薄い緑色がかった無色透明なガラスのカット装飾を、写真に映し出すのは難しい。加えてこれらの碗類では、白い膜を張ったような銀化がしばしばみられ、その膜と共にカット装飾まで剥落し、そのカット部分が不鮮明な箇所については、角度や光を変えながら僅かな刻線の痕跡を識別する研究者の目が必要となる⁽⁹⁾。

3-1、柄の長い十字架を担ぐ人物立像:殉教聖人・助祭長ラウレンティウス(図1)

薄い緑色がかった透明の浅碗。直径18cmの碗の上三分の二近くが残っているが、中央右側の一部欠損。高さ5.6cm。口縁の下に三本の刻線。碗を内側からみると、その中央には、正面を向き、右手でキーロー・モノグラム付きの長い柄の十字架を肩に担ぎ、左手には開いた冊子本(または二枚折書字板 *diptych*)を持ち、頭に光背をいただいた長髪無髭の人物が左足を一歩前(向かって左)に進めている。その身体は長衣で覆われているが、右手首にかけたパリュム?の裾を右へ、左手首にかけた長衣の裾を左へと、それぞれ逆方向に引っ張っているため、ゆったりした衣服であるにも関わらず、「陰刻」工房が特異とする幾重にもよった襞がその華奢な身体ラインを示しつつ立体感を出している。人物の足元は欠損のため不明。人物の左側には、たわわに実をつけたナツメヤシの木が一本と、さらにその左に星のような印が、人物の右側には、二段の異なる編込み模様を見せる方形—または円筒形の



図1 「プロティロの邸宅出土、Museo Ostiense, inv. no. 5201 ©L. Saguiによる実測図」

籠のようなものとその上に並ぶ5つの丸い物体が、そして人物の右手の斜め上にはキーロー・モノグラムが配されている。浅碗の下部には、*esergum* の区分線かと思われる線が、ナツメヤシの木の下と、人物像の向かって斜め左下の一部に残っている。

この主題がキリスト教的であることは、キリストの名前の最初の二文字を組み合わせたキーロー・モノグラムが二度も、人物が掲げる十字架の先と、人物と籠の中間上部に、それぞれ配されていることから明らかである。さらにこの人物が聖なる人であることは、頭部の光背が示している。

発掘者の Squarciapino は、この人物像をキリストと捉え、左脇の籠はパン籠とみなし、「勝利のキリスト像」と解釈した (Squarciapino 1952)。Lepri-Sagui は、Squarciapino の説を継承している (Lepri-Sagui 2018)。Paolucci は、5世紀初頭から半ばにかけて建設されたラヴェンナ、ガッラ・プラチディアのモザイクに描かれた聖ラウレンティウス像⁽¹⁰⁾を根拠に、キリストではなく、ラウレンティウスだとみなす (Paolucci 2002)。筆者は、この人物像の特定に関して、構図やポーズなどの図像的特徴から、Paolucci の説を支持する。本碗を先のモザイク画と比較すると、頭の光背、ほぼ正面向きの顔、長い十字架の手前を右手に持ち右肩に担ぐポーズ、左肩から右手首にかけてと右裾から開かれた冊子本を持つ左手首へとパリウムが強く引っ張られている様子、左足元の裾の動きなど、ほぼ同じである。このような、衣服の左右への動きや、裾の動きは、この人物像に動きを与えている。オスティアの事例と異なるのは、人物像の髪型が短髪で短い顎鬚があること、担ぐ十字架にモノグラムがなく、冊子本にはリボンが付き、ナツメヤシの木がなく、ラウレンティウスが力強く歩みを進める先には彼の殉教を物語る燃え盛る炎と鉄格子があり、さらにその先に聖書を収めた書棚がある、などの6点だろう。なお、どのように殉教したかを物語る鉄格子がラウレンティウスのアトリビュートとして登場するのは、5世紀半ば以降に入ってからである。ラウレンティウスだけでなく、残酷さや苦痛を想起させる拷問器具や処刑道具などは、4世紀の殉教聖人たちには用いられない。むしろ彼らはすでに天にあげられ、他の聖人たちと喜びのうちにキリストを称える姿であらわされた。では、福音書の入った書棚はどうか。筆者には、先行研究で「パン籠」といわれるものは、実は福音書の入った書棚に先行する「巻物の入った容器 *capsa*」ではないか、と思われる。初期キリスト教美術では、パン籠は「パンの増加」の奇跡場面で繰り返し描かれているが、どんなに省略して描かれる時でも、丸いパンの上には十字の切り込みが入れられ、簡単にパンと見極めることができる。これに対し、本碗でパンに相当する5つは、丸ではなく短い円筒の形をしており、その上には十字の切り込みがない。そこで、把手や鍵の部分がないものの、下の方形一円筒形の網籠は *capsa*、その上の5つの円は、*capsa* から飛び出た巻物の頭の連なりだと推察する。同様な、巻物らしきものが入った網籠は、「陰刻」工房製と思わ

オステイア・ポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）れるキリスト教的事例（Nagel II, 265, no.215）にもみられる。開かれた冊子本と共に巻物が殉教聖人の傍に描かれた事例は、ドミティッラのカタコンベ、墓室15の聖女ペトロネッラと故人ウエネランダが描かれた4世紀後半の壁画でもみられ（山田2007、89）、後述するObernburg出土の碗でも聖人たちの傍にcapsaに入った巻物がみられる。おそらく、卷子本は旧約を、冊子本は新約を示すのだろう。

筆者がラウレンティウス説を支持する根拠はもう1つある。ローマのカタコンベから出土したことで知られる円盤型の金箔ガラスの1つ、同聖人の記銘付き断片である⁽¹¹⁾。直径10.4cmの円盤は、11時から5時の方向に斜めに割れた右半分近くが残っている。残念ながら、切断部付近はガラスの銀化が進み、下からライトを当てた写真でかろうじて金箔装飾が確認できる程度であるが、円盤の中央には、ほぼ正面向きのラウレンティウスの胸像の一部が残っている。4分の3正面向きの、短髪巻毛で顎鬚のある、まっすぐに通った鼻筋に大きな目と小さな口が特徴的な顔、頭の背後のキーロー・モノグラム、さらにその背後に向かって右上斜めに配された柄の長い十字架などが確認できる。十字架とラウレンティウスの左肩の間にその名LAVRENTIOが、さらにその下には、Ωの文字が配されている。Ωは、今は失われた反対側にAが配され、世のはじまりとおわりを示唆していたと思われる。さらに円盤の一番外側には、---ANE / VIV / AS IN CR[isto]の銘文がめぐり、最初の部分は不明だが、おそらく依頼主の名前で、「○○よ、キリストの内に生きよ！」という mottoであったと推察される。金箔ガラスでは、筆者が知る限り、記銘からラウレンティウスと特定できる事例が7点ある（藤井2009、261-266、292）⁽¹²⁾。ただし、柄の長い十字架を有する事例はこの1点のみで、残りは他の聖人と描き分けのされていない、哲学者のように描かれている。

ラウレンティウスは、ヴァレリアヌス帝が第二勅令で教会聖職者を対象に行った258年の迫害時（豊田1994、184-224；保坂2007）に、ローマの司教（現教皇）シクストゥス二世（藤井2009、287-295）に続いて殉教した助祭長である。4世紀半ばのローマ教会の祝日表「*Depositio Martyrum*（殉教者暦）」では、ティブルティナ街道で8月10日に単独でその祝日が祝われたことが記されており、先に触れた同聖人に捧げられたオステイアのバシリカの示唆もあり、ローマとその港町で崇敬を集めた聖人の一人である。同聖人について、Paola Maroneは、389-391年頃に書かれた聖アンブロシウスの『*De officiis ministrorum*（聖職について）』に、失われたラウレンティウスの殉教録や、聖職者のあるべき姿―「キリストの倣い」と「司教への献身」―が記されているとする（Marone 2009）。すなわちその殉教録は、殉教直前の出来事が中心に語られており、①殉教したシクストゥス二世とのカリストゥスの墓での対話、②帝国官吏が没収しようとした教会財産の貧しい者への分配、③燃え盛る鉄格子の上での拷問、そして④処刑人の前で放った「この部分はよく焼けているから回して食べなさい（*assum est, versa manduca*）」という皮肉な文言が、その基本

的要素だったとする。そして、①②では、司教に託された任務を助祭の筆頭として忠実に果たし、権力者にはなく貧しい人々への奉仕を貫き、③④では、キリストの死と復活に重なる「三日後」に司教に続いて殉教し、キリストが最後の晩餐で述べた「手にとって食べなさい (*accepit et comedit*)」と重なる言葉を残しているという。オステリア出土のこの十字架を担ぐ人物像が、勝利のキリスト像を髣髴とさせるのは、まさにラウレンティウスがキリストに倣って、重ねられて語られていることも影響しているかもしれない。

十字架を背中に担ぐポーズは、本事例の他に2点、カット・ガラス碗で報告されている。いずれも立像で、「陰刻」工房製と思われる。1点目は、フランスのナルボンヌ出土の断片で、Daniel Foyにより、本事例を参考にした想定復元図が提示されている (Foy-Nenna 2001, 228, no.441; Nagel II, 226, no.182)。その図によると、向かって右に歩を進める人物が、長い柄の、先にモノグラムが付いた十字架を左手で持ちあげ、下げた右手には冊子本を持っている。直径14cmとやや小ぶりの碗の左上断片部分のみに注目すると、頭の光背、横に倒れたモノグラム付き十字架、開いた冊子本の一部と、ナツメヤシの木の葉の3本などが確認でき、さらに口縁下には3本の刻線がみられる。これらの特徴は全てオステリアの事例に共通する。年代は5世初頭に設定されている。もう1点は、2005年にローマのティベリス街道で発見された直径16.7cm、高さ3.2cmの浅碗で、最上部の一部が欠けている以外は、ほぼ完形である (Nagel II, 227, no. 184)。画面の最下部には、「陰刻」工房の特徴の1つである、波打つ蔦の葉に交互に配された八花卉の帯が占め、碗の両端にはナツメヤシの木が二本配されている。そして画面中央には、条飾り付きのゆったりとしたトゥニカとパリウムを着た威風堂々たる人物が、正面向きで立っている。左手には開いた冊子本を持ち、高く掲げた右手で、肩に真横に担いだ十字架の柄の部分を持っている。その柄の部分からは長いリボンがたなびき、その下に紐で縛られた巻物が一本宙に浮いている。残念ながら、わずかに欠けた最上部は、まさにその人物の顔があった場所で、容貌は不明である。Nagel はこれらの十字架を担ぐ人物を全てキリストとしているが、これらの特徴は、ラウレンティウスを指示しているように思われる。もっとも次にみる律法の授与図のレパトリーの中には、ペトロが柄の長い十字架を担ぐ姿もみられる。このため、ペトロの可能性もあるが、ペトロが単身像でこのように描かれる事例を筆者は知らない。

3-2. ポルトゥス出土の律法の授与図 *Traditio Legis*(以後 TL 図と呼称)(図2)

淡緑色を帯びた無色透明のガラス製浅碗の断片。この断片は、サイズは7.6cm × 10.8cm、厚みは1.5cmとごく小さく、その表面が一部銀化していてカット装飾が不鮮明な部分もあるが、まぎれもないTL図であることを示す、重要な部分が残っている。その詳細に行く前に、まずTL図とは何かをみる。

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井)

TL 図は、キリストの両側に二大使徒が配された三人一組の像である。その基本的な要素は、①中央のキリストが(天を象徴する四つの小川が流れる)小高い丘の上に正面を向いて立ち、右手を下げてその下に待るペトロに広げた巻物を渡し、左手を挙げてその下に待るパウロを祝福する、②画面向かって右のペトロが、時に長い十字架を左肩に預けながら、その巻物を受け取るべくパリュムで覆った両手を恭しく掲げる。③向かって左のパウロは右手を挙げて、その場面を称揚する、というものである。両側の二大使徒はキリストを見上げる横顔で描かれ、その背後にナツメヤシの木が配される場合は、パウロ側のナツメヤシの木にフェニクッスが止まっていることもある。また、上下二段構造になっている場合は、三人一組の立像の下に、それぞれに対応するかのよう中央の丘に立つ子羊、その両側のイエルサレムとベツレヘムの都を示唆する城門から子羊の列が向かう図が配されることもある(名取1977; Spera 2000, 288-293)。

このタイプの図像が TL 図とよばれる由縁は、キリストがペテロに授与する広げた巻物に記された *dominus legem dat* という銘文にある。そして、この図像の元となる表現は、先のテオドシウスの *missorium* で皇帝が高官に巻物を渡して任命をしていたように、皇帝美術の影響をうけたとする見方もある(Bisconti 2003)。一方で、Umberto Utro は、ヴァチカン博物館所蔵の初期キリスト教的石棺の紹介において、この図が旧約のモーセに対し、ペトロが「新モーセ」として、古い律法に代わる慈愛に満ちた「新しい戒め(模範)」を受け取る図だとみなす(その一例として、ヨハネの黙示録 13:14で、主が弟子たちの足を洗った後に、彼らに手本を渡したと述



図2 「ポルトゥスのバシリカ出土、Musei Vaticani (Museo Cristiano inv. no. 60313) ©L. Sagui による実測図」

べている)。この TL 図については、4 世紀後半にローマで生み出された図像と考えられている。そして、4 世紀後半から 5 世紀初頭の TL 像については、2015 年の Robert Couzin の『律法の授与図：イメージ分析』に、壁画、天井モザイク、石棺、貨幣、金箔ガラス、カット・ガラス、粘板岩製の鋳型などが収録されている (Couzin 2015)。

TL 図が生まれた頃のローマ司教は、ダマスス 1 世 (在位 366–384 年) である。前司教のリベリウス時代に続き、対立司教が擁立され、内部分裂を起こしていた時代、同司教は 382 年のローマ教会会議で二大使徒がローマで布教・殉教したことからローマ教会の優位性を説いたが、ペトロとパウロの二大使徒だけでなく、ローマのカタコンベに眠る殉教者たちの墓を再整備し、フィロカルス書体という新しく独特な書体で大理石板に彼らへ捧げる六脚律の頌歌を刻ませて飾ったことでも知られる (Ferrua 1942、山田 2014)。近年では、ダマスス 1 世の影響がローマだけでなくオスティア・ポルトゥスにも及んでいたことを示す、同書体を有する碑文が目ざされている (Fiocchi Nicolai 2018)。このことから、Cacilie Davis-Weyer が 1961 年に提唱したように、聖都に眠り庇護する二大使徒をキリストに組み合わせさせた TL 図は、彼の治世下でなされた可能性がある (Davis-Weyer 1961, 30-31; Bisconti 2005, 76-77)。なお、金箔ガラスにも TL 図が確認されているが (藤井 2009, 134–135)、同司教はこの金箔ガラスの中でも他の聖人たちと組み合わせられた 4 人一組の胸像タイプで 2 点確認される (藤井 2009, 292、表 5。Morey 250 番では、ダマススがペテロ、パウロ、シクストゥス二世と共に描かれている)。

それでは、ポルトゥス出土の断片にもどらう。Sagui の実測図 (図 2) を元にみると、中央に立つキリストの左肩と頭部の光背の一部、開いた巻物を渡す左手、その巻物に記された銘文 *LEX DOMINI* (L の横棒がやや短く D、O の線は大きく途切れ、M は W のように逆さだが)、その巻物をうやうやしく、直接触れないように両手でパリウムの裾を広げ、律法を包み込むように受け取る短髪 (顎鬚の有無は銀化のため不明) ペトロの上半身、キリストとペトロの間の上部に配された円に囲まれたキーロー・モノグラムとその左の A (右にあるべき Ω は銀化のため不明) の大文字、などが確認できる。また、写真では何も痕跡が残っていないかにも見えるキリストの容貌の手がかりとなる刻線のごく一部が、Sagui の実測図では断片の右端にかろうじて残っていることが示されている。TL 図では、中央のキリストは正面向きが多いため、この刻線をキリストの頭髪一部と解釈するのが妥当であろう。この他、「陰刻」工房のカットの特徴でもある、彫刻的な印象を与える深い陰刻は、幾重にも髷がよったトゥニカとパリウムの衣服部分によくあらわれている。

帝政後期のカット・ガラス浅碗で、TL 図だと確定できる事例は、イタリア以外で二点報告されている。一点はスペインの Almoyna-Platz (ヴァレンシア)、もう一点はドイツの Obernburg である。いずれも「陰刻」工房と思われる。この二点はし

オステイアールポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井)かし、TL図だけで占められているのではない。碗の装飾は水平に三段に分割され、碗の内側からみると、一番上の半月空間にTL図、中間の帯状空間とその下の半月空間に聖書場面が組み合わされている。このような組み合わせは、石棺の装飾分割を想起させる(山田2019、227-228)。1点目のAlmoia-Platz出土の断片(Nagel II, 239, no. 196)は、直径20cm、高さ8cmの浅碗で、その中央上部から左上部にかけてと、その他いくつかの小断片が残っている。Soriano Sanchezの実測図は、碗の外側から描かれたものであるため、反転させて解説すると、一番上のTL図では、中央に光背を有する短髪で顎鬚のないキリストが正面を向いて立ち、その頭部の両側にはAとΩを伴うキーロー・モノグラムが配されている。キリストの右半身は欠けているが、重要な腕の動きは残っている。すなわち、向かって右下のペトロに巻物を渡したばかりの左手は下がっており(巻物は手から離れ、ペトロはすでに巻物を受け取っている)、向かって左下のパウロを称揚する右手は高くあげられている。二大使徒はいずれも短髪に顎鬚、中央のキリストを見上げる横顔で描かれ、両手をキリストへと掲げている。それぞれの背後には、細いナツメヤシの木が配されている。中段の向かって一番左からみると、杖に巻き付いた大きな蛇を前にしたパリウムを着た人物像(モーセと青銅の蛇?)、一本の若木、アンフォラを逆さに持つ(液体を注いでいるだろう)短いトゥニカを着た人物の一部(カナの奇跡?)が残っている。その下の、下段を向かって左からみると、上の部分だけしか残っていないが、男性のオランス像(?左手のみ手を挙げている様子がわかる)、ヴェールを被った女性のオランス像(頭部にそれぞれAとΩの文字)が描かれている(Goerich 2009)。

2つ目は、ドイツのObernburgでリメスの土塁の中から発見された、直径25.8cmの浅碗の断片である(Deckers 1998; Nagel II, 239, no. 197)。碗は、きわめて断片的にしか残っていないが、実測図ではほぼ全体が想定復元されている。一番上の半月空間を占めるTL図には、2つの特徴がある。一つはキリストと二大使徒に記銘がなされていることだ。*PETRVS*、*SALBATOR*、*PAVRVS*と、キリストが*SALBATOR*(=salvator)救世主と記されている。もう1点は、ペトロとパウロの配置の逆転である。記銘の順序通り、向かって左下にはパウロではなくペテロが控え、すでに巻物を手にしていることがわかる。そして、ペトロが受け取った巻物の下には、さらに*capsa*があったと考えられる。なお、右下に控えるパウロは、残念ながらその頭部しか残っていない。このため、キリストが左手を下げてパウロにも律法を授与しているように補われているが、断定はできない。中間の帯状空間も断片的だが、中央にはベッドを担いで歩く中風患者の癒しが、向かって右端には岩うつペトロの奇跡場面、下の半月空間には、向かって右に、右手をあげるトゥニカとパリウムを着た人物(キリスト?)、中央には犠牲のために組まれた薪の上に座るイサクの足先(イサクの犠牲)が描かれていたと想定されている。

3-3. ボルトゥス出土のキリスト教的三人一組の立像（キリストと殉教者）（図3）

淡緑を帯びた無色透明の三断片の内、二断片は接合され、直径約20cmの碗の半分近く（17.1cm × 10.5cm）が復元されている。残りの一断片は4cm × 6cmと小さいが、この碗が三人一組の立像であったことを物語るもう一人の足元が刻まれている。なお、先のTL図に比べ、ガラスの緑色が濃く感じられるのは、その厚みが0.35cmと、2倍以上だからである。

先の図と同じく、Saguiによる実測図（図3）を元にまず大きな断片のカット装飾からみる。この大断片には、キリストの右に立つ人物と、中央に立つキリストの身体の右半分の一部が残っている。

キリストの頭部は欠けているが、顎鬚があり、肩までかかる長い髪に光背を有していたことはかろうじて確認できる。また光背に接するように、その右にはキリストの名を象徴するキーロー・モノグラムが配されている。右手は、右下の人物を称えるように高く掲げられ、条飾りの付いたトゥニカとバリウムを着用している。その右下の人物は、顔と足はキリストの方を向いた横向きで、身体は四分の三正面を向いて *podium*（基壇）に立っている。*podium* の下には小石のような丸いものが散

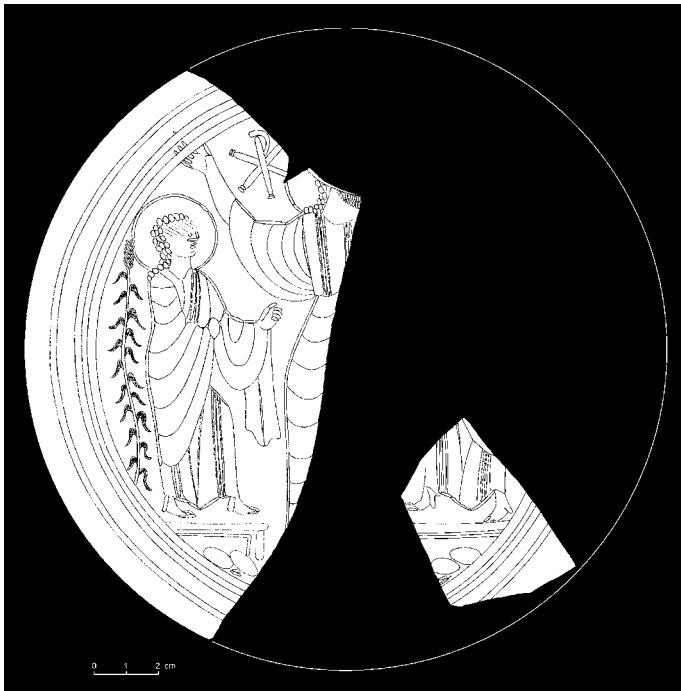


図3 「ボルトゥスのバシリカ出土、Musei Vaticani (Museo Cristiano inv. no. 60314-60315) ©L. Sagui による実測図」

オステイア・ポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井)らばっている。両手の動作は明瞭ではないが、先の TL 図のペテロのように、パリュムの裾を両手で広げているようにもみえる。髪はキリストと同様に肩まで流れる長髪で、顎髭はない。この人物の前髪から目のあたりに斜線が入っているのは、Sagui の実測図には記されていないが、この部分が二断片の接合部にあたり、とりわけ下の断片の接合部に細かい割れが入っていて、詳細が不明だからである。衣服は条飾りの付いたトゥニカとパリュムで、足は裸足である。この人物の背後一右側には、背の高い葦 *Phragmites australis* のような植物が描かれている。De Rossi の図では、背の高い茎と上の穂の部分だけが描き起こされているが、Sagui の図では、茎の両側に交互に垂れる 9 枚の葉が描かれており、これが木ではなく、水草を表現しようとしたことがわかる。

なお、碗の右下断片も、キリストの左にいた人物が、右の人物と同様な、条飾りの付いたトゥニカとパリュムを着て *podium* に立つ裸足の人物であったことを物語っている。最後に彫り方をみると、先の TL 図と同様に、髪は旋盤を軽く当てた小楕円形の列で、顎髭はそれよりも細い旋盤を軽く当てたより線に近い楕円の列で表現し、幾重にも重なる髭のよった衣服を深く掘り込むことで彫刻的な印象を与えている。また、この碗が最初に中心部の図像から彫られ、最後に口縁下の三重の刻線が彫られたことが、キリストの右手の上が一番下の刻線が通ってしまっていることからわかる。

この断片は、近年の研究で先の TL 図と共に TL 図として引用されることが多い。たとえば先にあげた Couzin (Couzin 2015, p.118, fig. 53) でも、Nagel でも (Nagel 2021, 222, no.176) でも TL 図として引用している。そこで、筆者も当初は TL 図としてみていた。しかしながら、上述の通り、あらためてこの図に向き合うと、TL 図と確定できる要素は無きに等しい。そもそも、初期キリスト教考古学の父 G. B. De Rossi が1868年に、キリスト教的主题を有するポルトゥス出土のカット・ガラス断片の一つとしてこの断片を発表した際には、キリストとその両側の聖人もしく聖女たちとし、さらに論を進めてポルトゥスで崇敬を集めたエウトロピウス、ゾシマとボナサ姉妹のような殉教者のペアとみなした。Squarciappino もこの断片はキリストと聖人たちの図とし、TL 図にはあてていない。筆者は、初期キリスト教美術でガラス工芸品に聖女や殉教聖女が描かれる際には、オランス像という両手をあげた祈りの姿勢で描かれることが多いため、キリストの両側の人物が殉教聖女だったかについては疑問である。ただし、ポルトゥスで崇敬を集めた殉教者のペアだった可能性は、キリストの右側の人物の背後に描かれているのが、TL 図の一要素を構成するナツメヤシの木ではなく、川面に生えている葦のような水草であることが、示唆的に映る。ポルトゥスでも殉教者崇敬を高める活動がローマと連動して行われていたことは、フィロカルス書体の碑文が出土していることからもうかがわれる。ローマの『殉教者暦』でも 9 月 5 日にアコンティウス、ノンヌス、ヘラクラヌス、タウ

リヌスがポルトゥスで祝われたとある。

おわりに

オステリアとポルトゥスで出土したカット・ガラス浅碗断片3点は、すべて4世紀末に活動した「陰刻」工房製で、ローマで新たに生まれた「聖都」を象徴するような図像—「十字架を担ぎ冊子本を持つラウレンティウス」、「律法の授与図」、「キリストとポルトゥス?の殉教者たち」—が刻まれている。ローマは、帝国の都としての地位を330年に東のコンスタンティノポリスに譲り、新たにペトロとパウロの二大使徒をはじめ、迫害に屈せずに信仰を貫き、天国で永遠の生を勝ち取った殉教者たちの眠る聖都へと生まれ変わった。その産声は、教会内部の分裂という問題を抱える中であげられたが、ダマスス1世の貢献は実を結び、美しく再整備されたローマの殉教者たちの墓を巡礼者たちが詣で、彼らへの仲介と庇護を求めた。イタリア以外で出土した類例は、このような巡礼者がローマで購入し、故郷に持ち帰ったものかもしれない。またダマスス1世の助祭であったシリキウスは、シクストゥス二世に従った助祭長ラウレンティウスのように前司教(教皇)の方針を守った。ローマ教会の祝日表の「*Depositio Martyrum* (殉教者暦)」は、ローマだけでなくその港町を含む周辺まで殉教者たちの放つ光の環を広げている。オステリアとポルトゥス出土のキリスト教的浅碗断片は、3点と数は少ないものの、じっと見つめていると、4世紀末の聖都ローマで捧げられた頌歌が今に響いてくるかのようである。

謝辞 本稿のテーマである、ローマの4世紀後半のカット・ガラスについて、最新の研究動向も含めご指導くださり、またご自身がまだ発表されていない実測図の使用許可を与えてくださった Lucia Sagui 先生に心より感謝申し上げます。

後注

- (1) ローマのドイツ考古学研究所、アメリカ・アカデミーがオステリアの第 III、IV、V 地域で実施した37回分の調査、アウグスブルク大学が市場の区画で実施した発掘、ローマの英国アカデミーがポルトゥスの皇帝宮殿で行った調査、ならびにオステリア考古学公園が保管・管理するガラス遺物や記録などが対象。ポルトゥスから発見された二次工房の窯址については、ポルトゥス・プロジェクトがその詳細を発表予定。
- (2) 以下本文で言及する Sagui-Lepri2018の実測図および出土品のカラー写真は、オンラインで公開されている論文参照のこと (<https://doi.org/10.4000/mefra.6506>)。
- (3) 建築にかかわるガラス製品、板ガラスやガラス製のオプス・セクティレ用の疑似大理石板、またはモザイク用のガラス製テッセラなどについては、Sagui や Lepri が個別に調査・発表してはいるが、上記の2つの集成では対象とされていない。

オスティアールポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井)

- (4) 古代ローマのガラス製造には、原料となる砂(珪砂 SiO_2)と、天然ナトロン/ソーダ(炭酸ナトリウム Na_2CO_3)を精製・溶融してガラス化させる一次工房と、その原料塊を坩堝で溶かして製品にする二次工房があった。一次工房はシリア・パレスティナおよびエジプト、二次工房は帝国全土で確認されており、地中海に沈む難破船から、原料塊は船底にバラストとして積まれて二次工房に輸出され、二次工房からは、ガラス製品やリサイクル用の壊れたガラス屑などが積まれて交易されたことが明らかとなっている。
- (5) プテオリ(現 Pozzuoli)は、ナポリ北西のカンピ・フレグレイと呼ばれる火山地域の、三方を見渡す切り立った崖に深い湾という立地に、アウグストゥス帝が建設した全長365mもの大埠頭が海に突き出した、アレクサンドリアからの大型穀物輸送船も寄港できる大港。紀元後1世紀にティレニア海側の「東方の窓口」としてその最盛期を迎え、ポルトゥスの完成をもって衰退したとする説もあるが、穀物輸送については2世紀半ばごろまで、他の物品についてはプテオリがブラディシスマというその地域特有の地盤の緩慢な隆起と沈下を繰り返す現象によって港の機能が失われるまで、オスティアールポルトゥスと補完的な関係を保ちながら、都の物流を支えたと思われる。一方隣接するバイアエ(現 Baia)は、効能ある温泉や牡蠣の養殖で名を馳せた温泉保養地。
- (6) 市場地の二次工房の窯については、アウグスブルク大学の下記のhp、Abb. 8aとAbb. 8b参照。
[https://www.uni-augsburg.de/de/fakultaet/philhist/professuren/kunst-und-kulturgeschichte/ klassische-archaologie/forschung/ausgrabungen-im-sogen-macellum-von-ostia/](https://www.uni-augsburg.de/de/fakultaet/philhist/professuren/kunst-und-kulturgeschichte/klassische-archaologie/forschung/ausgrabungen-im-sogen-macellum-von-ostia/)
- (7) ローマの工房である可能性が高いグループには、もう一つ4世紀半ば頃活動した「gruppo a clipei(盾グループ)」という、円や四角い額縁の中に風景や人物像が刻まれるタイプがある。古代では壁に飾る盾に神話場面などの装飾が施されていたためこの名称となった。オスティアとポルトゥスの出土事例には、筆者が知る限り含まれていなかった。
- (8) 直径10.4 cm、高さ5 cm、厚み0.7 cm。メトロポリタン美術館、inv.no. 18.145.3
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/465923?searchField=All&ft=saint+lawrence&offset=0&rpp=80&pos=3>
- (9) なお、ポルトゥスの二断片については、2017年10月26日ヴァチカン博物館開催の「ヴァチカン・コレクションのポルトゥス出土のカット・ガラスおよび古代末期の図像付きガラスの製造」でSaguiが使用した、しかしまだ出版はされていない図をご厚意で使用させていただく。
なお、ポルトゥスの二断片については、Saguiが2017年10月26日にヴァチカン博物館で開催された講演会「ヴァチカン・コレクションのポルトゥス出土のカット・ガラスおよび古代末期の図像付きガラスの製造」で使用した、しかしまだ出版はされ

ていない図をご厚意で使用させていただく。

- (10) 写真は下記 URL 参照：<https://www.artesvelata.it/wp-content/uploads/2020/12/Martirio-di-san-Lorenzo-prima-meta-del-V-sec.-Mosaico.-Ravenna-Mausoleo-di-Galla-Placidia-arte-svelata.jpg>
- (11) 直径10.4 cm、高さ 5 cm。メトロポリタン美術館、inv.no. 18.145.3
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/465923?searchField=All&ft=saint+lawrence&offset=0&rpp=80&pos=3>
- (12) *LAVRENTIVS*, *LAVRENTEVS*, *LAVRETI* 等の綴りの記銘付きで、Morey 1959のカタログ番号を用いてその内訳を示すと、単独像は2点（040、460）；二人組はカルタゴ司教で殉教者のキュプリアスとの1点（036）；三人組はローマの殉教聖女アグネスとキリストとの1点（283）と二大使徒との1点（Morey のカタログになく、Vopel 1899, 376）；七人組はパウロ、シクストゥス二世、ヒュポリトス、ティモテウス、キリストとの1点（344）。

参考文献

Bauer 2009

F. A. Bauer, *Gabe und Person: Geschenke als Träger personaler Aura in der Spätantike*, Eichstätt, 2009.

Bisconti 2003

F. Bisconti, *Variazioni vecchie e nuove sul tema della Traditio Legis*. Vecchie e nuove acquisizioni, in *Vetera Christianorum* 40, (2003), pp. 251-270.

Boersma 1985

J. S. Boersma, *Amoenissima Civitas: Block V.ii at Ostia: Description and Analysis of its Visible Remains*, Assen, 1985.

Boin 2013

D. Boin, *Ostia in Late Antiquity*, Oxford, 2013.

Couzin 2015

R. Couzin, *The Traditio Legis: Anatomy of an Image*, Oxford, 2015.

Davis-Weyer 1961

C. Davis-Weyer, *Das Traditio-Legis-Bild und seine Nachfolge*. *Münchener Jahrbuch der bildenden Kunst* 12 (1961), S. 7-45.

Deckers 1998

J. G. Deckers, *Die römische Schale aus Obernburg, Frankenland*. *Zeitschr. fränk. Landeskd. u. Kulturpflege* 50-1, 1998, S.6-11.

De Rossi 1868

オステイアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に (藤井)

G. B. De Rossi, Utensili cristiani scoperti a Porto. *Bullettino di Archeologia Cristiana*, 6/3-6 (1868), pp. 33-44.

Ferrua 1942

A. Ferrua, *Epigrammata Damasiana*, Roma 1942.

Fiocchi Nicolai 2018

V. Fiocchi Nicolai, Damaso Filocalo e l'epigrafia di committenza papale nell'hinterland di Roma. A proposito degli interventi monumentali dei vescovi di Roma nelle diocesi limitrofe, in *Studi in memoria di Fabiola Ardizzone, I, Epigrafia e Storia*, Palermo 2018, pp. 129-153.

Foy-Nenna 2001

D. Foy et M-D. Nenna, *Tout Feu Tout Sable: Mille Ans de Verre Antique dans le Midi de la France*. Marseille, 2001.

Fujii 2003

Y. Fujii, "An Iconographical Study of *Baiae* Group Flasks: Are Vaulted Buildings Fishponds or not?", *Annales de l'Association Internationale pour l'Histoire du Verre* 15 (2003), pp. 73-77.

Fujii 2009

Y. Fujii, Report on four Roman Glass Fragments from the Gorga Collection: a attribution to the "*Puteoli-Baiae* Group", *Annales de l'Association Internationale pour l'Histoire du Verre* 17 (2009), pp. 136-142.

Gialanella 1999

C. Gialanella, "Una fornace per il vetro a Puteoli", in a cura di Ciro Piccioli e Francesca Sogliani *Il vetro in Italia meridionale e insulare, Atti del primo convegno multidisciplinare (Napoli 5-7 marzo 1998)*, Napoli 1999, pp. 151-160.

Gliozzo et al. 2017

E. Gliozzo, B. Lepri, L. Sagui, I. T. Memmi, Colourless glass from the Palatine and Esquiline hills in Rome (Italy). New data on antimony- and manganese-decoloured glass in the Roman period, *Archaeological and anthropological sciences*, 9 - 2 (2017), pp. 165-180.

Goerich 2009

B. Goerich, El primer cristianismo en la ciudad. La figura de San Vicente Mártir, in J. Hermosilla Pla, *La ciudad de Valencia. Historia, geografía y arte en la ciudad de Valencia II*; Valencia, 2009, pp. 276-277.

Grazzigli 2004

G. L. Grassigli, Il missorium di Teodosio: tra iconografia e iconologia, *L'Annuario della Scuola Archeologica di Atene e delle Missioni Italiane in Oriente* 82 (2004), pp. 519-542.

La Rocca-Ensoli 2000

A cura di E. La Rocca, S. Ensoli, *Aurea Roma. Dalla città pagana alla città cristiana*, Roma,

- 2000.
- Lepri 2021
B. Lepri, *Il vetro tra II e III secolo d. C.: produzione e distribuzione in area romano-ostiene*, Roma, 2021.
- Maiorano- Paroli 2013
M. Maiorano, L. Paroli, a cura di, *La Basilica Portuense. Scavi 1991-2007*, Firenze 2013.
- Marone 2009
Paola Marone, Lorenzo martire e l'antico ministero del diaconato, in "Cristianesimo nella storia" 30 (2009), pp. 579-589.
- Meredith 2015
H. G. Meredith, *Word Becomes Image: Openwork Vessels as a Reflection of Late Antique Transformation*, Oxford, 2015.
- Morey 1954
C. R. Morey, *The Gold-Glass Collection of the Vatican Library*, Citta del Vaticano, 1959.
- Nagel 2020.
S. Nagel, *Die figürlich gravierten Gläser der Spätantike. Archäometrische und archäologische Untersuchungen*, 2 Bde, Regensburg, 2020.
- Paolucci 2002
F. Paolucci, *L'arte del vetro inciso a Roma nel IV secolo d. C.*, Firenze, 2002.
- Paris et al. 2015
R. Paris, R. Frontoni, G. Galli, C. Lalli, "Dalla villa al casale: attività produttive nella villa dei Quintili", in a cura di A. Molinari, R. S. Valenzani, L. Spera, *L'archeologia della produzione a Roma (secoli V-XV)*, Bari, 2015, pp.195-211.
- Sagui 1996
L. Sagui, Un piatto di vetro inciso da Roma: contributo ad un inquadramento delle officine vetrarie tardoantiche, in a cura di M.G. Picozzi, F. Carinci, *Studi in memoria di Lucia Guerrini*, Roma, 1996, pp. 337-358.
- Sagui 2007
L. Sagui, Glass in late antiquity: the continuity of technology and sources of supply, in ed. By L. Lavan, E. Zanini, A. Sarantis, *Technology in Transition A.D. 300-650 (Siena 2004)*, Leiden-Boston 2007, pp. 211-231.
- Sagui 2008
L. Sagui, Vetri incisi, in a cura del R.Del Signore, *Palazzo Valentini. L'area tra antichità ed età moderna: scoperte archeologiche e progetti di valorizzazione*, Roma 2008, pp. 132-134
- Sagui 2009:
Ateliers de verre grave à Rome au IV^e siècle AD: nouvelles données sur le verre grave "à

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に(藤井) relief négatif”, *Annales de l'Association Internationale pour l'Histoire du Verre* 17 (2009), pp. 206-216.

Sagui-Lepri 2017:

L. Sagui, B. Lepri, La produzione del vetro a Roma: continuità e discontinuità fra tardoantico e altomedioevo, in ed. by A. Molinari, R. Santangeli Valenzani, L. Spera, *L'archeologia della produzione a Roma (secoli V-XV)*, Roma 2014, Bari 2016, pp. 225-241.

Sagui-Lepri 2018:

L. Sagui, B. Lepri, Vetri e indicatori di produzione vetraria a Ostia e a Porto, *MEFRA* 130-2 (2018), pp. 399-409.

<https://doi.org/10.4000/mefra.6506>

Spera 2000

L. Spera, Traditio Legis et Clavium, in F. Bisconti(ed.), *Temi di iconografia paleocristiana*, Città del Vaticano, 2000, pp. 288-293.

Squarciapino 1952

M. Floriani Squarciapino, Coppa cristiana da Ostia, *BdA* 37 (1952), pp. 204-210.

Sternini 1989

M. Sternini, *Una manifattura vetraria del V secolo a Roma*, Firenze, 1989.

Vattuone 2000

L. Vattuone, Vetro dorato con Traditio Legis, in ed. by A. Donati, *Pietro e Paolo. La storia, il culto, la memoria nei primi secoli. Catalogo della mostra*, Milano 2000, n. 93, pp. 224-225.

Verità et al. 2017

M. Verità, P. Santopadre, B. Lepri, “A late 4th-early 5th c. AD secondary glass workshop in Ostia. An elemental composition study”, in *Bollettino ICR, Nuova Serie* 35, pp. 19-31.

名取1977

名取 一郎「コンスタンティナ廟堂の北側小アプシスのモザイク:「トラディティオ・レギス(法の授与)図」をめぐって」、『別府大学紀要』第18号(1977.2)10-39頁。

藤井2009

藤井慈子「ガラスのなかの古代ローマ:三、四世紀工芸品の図像を読み解く」春風社、2009年。

藤井2020

藤井慈子「ローマ・ガラスにみる帝政後期の港湾都市ブテオリースペイン、アウグスタ・エメリタ出土の新事例を中心にー」(野村俊一、空間史学研究会編『空間史学叢書3:まなざしの論理』東京、2020年、159-190頁。

保坂2007

保坂高殿「ヴァレリアヌス帝迫害」千葉大学文学部『人文研究』第36号、2007年3月、1-35頁。

豊田1994

豊田浩志『キリスト教の興隆とローマ帝国』南窓社、1994年。

山田2007

山田 順「初期キリスト教における聖人崇敬と民衆信仰－聖女ペトロニッラの図像とその意味－」『西南学院大学 国際文化論集』第22巻 第1号（2007）、81－112頁。

山田2018

山田 順「ローマ地下共同墓地における〈殉教者崇敬〉」『西南学院大学 国際文化論集』第28巻 第2号（2014）、43-73頁。

山田2019

山田 香「初期キリスト教美術におけるキリスト表現と「トラディティオ・レギス（法の授与）」図」『国際交流研究：国際交流学部紀要』第21号（2019）、209-234頁。

（イタリア在住ローマ・ガラス研究者）